

飛山濃水の地に根差した 岐阜大学の個性は世界に向けて輝きます



岐阜大学の個性は飛山濃水の地と呼ばれる岐阜県の風土に深く根差しています。岐阜県には日本一がいくつもありますが、その1つに包蔵水力(技術的・経済的に利用可能な水力発電量)があります。包蔵水力が日本一であるということは、雨や雪が多いだけでなく、緑のダムである森林に覆われた高い山が多く(森林面積率は日本で2番目)、水量が豊富で高低差が大きい川が多いことを意味しています。

岐阜大学の環境科学に対する取り組みも岐阜県の自然環境と密接に関わっています。環境問題には様々な側面がありますが、最大の問題はCO₂による温暖化にあります。このCO₂の吸収に森林が大きな役割を果たしていますが、それを数値で正しく評価するには森林の種類や気象条件、土壌条件などのほか、森林生態に及ぼす人為的影響など様々な要因を相互に作用し合うシステムとして扱うモデルが必要となります。これができれば、光合成による森林1km²四方毎のCO₂の吸収量を常時監視し、今どこ



岐阜大学理事
(副学長)

安田 孝志

でどれだけ森林によってCO₂が吸収されているかを気温分布図のように示せるようになります。岐阜大学は、流域圏科学研究センターを中心にこのような研究を「21世紀COEプログラム」として進め、生態学や衛星計測学、気象学、水文学などの分野の教員、研究員、学生が一体となって取り組む新しい学問「衛星生態学」の創生を目指しています。この研究の輪は、筑波、早稲田、茨城などの大学に留まらず、国の農業環境技術研究所、国立環境研究所、産業総合技術研究所から更には海外にまで拡がり、現在、ドイツのバイロイト大学、オーストリアのインスブルック大学、韓国の高麗大学、カンウォン大学、中国の北京大学との共同研究を2つの国際プロジェクトとして推進しています。そして、これらの成果を集めた国際シンポジウムを2008年の夏に「岐阜」で開催することになっています。岐阜県には豊かな自然があり、またそれがあるが故に岐阜大学は国内外の研究拠点として強みを発揮しています。